
オモイノタネ 8

風紙文

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

オモイノタネ 8

【Nコード】

N7120P

【作者名】

風紙文

【あらすじ】

巷で噂の、思いを込めて育てると欲したものが出来上がる不思議な植物の種子『発明の種』

これは、少女が旅を始めてから、一年後のクリスマスの話

(前書き)

今日はクリスマス。そんな日に、彼女達は……

世間的にはクリスマスと呼ばれている今日、私は誰かと過ごすこともなく、一人イルミネーションの施された街を歩いていた。

辺りにはクリスマスを楽しむ家族、友達グループ、彼氏彼女の組み合わせばかり、一人の人もいなくはないけど、きっと私とは違って、いっしょにこの日を過ごす人がいるんだ。

私が一人、一人だけ……

去年は違ったのに、去年はまだ、いっしょに過ごせる人が居たのに……皆、私を誘わずどこに行っちゃったんだろ。

そして、あの人はどこに行っちゃったんだろ。

そんな時、ふと後ろを見た。

ほんとに、特に何かを見たかった訳じゃないのに、私は後ろを振り返った。

そこには……

「……寒いね」

「アタシはなんともないわ、なぜならアタシは……」

「ナビゲーターだから」

「分かってんじゃない、機械に寒さ暑さを聞くのはムダってもんよ」

「……そうだね」

「いったいどうしたのよ？ 普段話もしない温度の話なんて」

「……それは……」

「水野葉さん！」

「……？」

こちらを振り返ったのは、やっぱり今私が名前を呼んだその人だった。

「ちょっとエリ、ダレよこの人？」

箱が喋った？ いや今はそれどころじゃない。

「水野葉さんだよな？ 私だよ、覚えてる？」

「……」

水野葉さんは黙っている。でも名前に振り返ったし、格好が少し変わってるけどこの人は絶対水野葉さんだ。

「ほら、去年同じクラスだった」

去年何も告げずに学校を辞めていった水野葉さんだ。

「……うん。覚えてる」

「やっぱり！ こんなところでどうしたの？ そんな格好して」

「……色々あった」

「いろいろって？」

「……色々」

なにがあったのかな？ まあいいやそんなこと。

「水野葉さん今ヒマ？ ヒマだよな、こんな所一人で歩いてるんだもん。良かったらお茶しない？ ほら、今日ってクリスマス……」

「……ごめん。それは出来ない」

え……？ な……

「な、なんで？ クリスマスに一人で出歩いてるなんてヒマだからでしょ？ あ、もしかして仮想パーティーに行くの？ だからそんな格好なんだね？」

「……そうじゃない」

「じゃあ……なんで？」

「……それは……」

「エリ、反応があったわ」

そこに箱の音が被った。普通に喋ってるけど、アレは無線機か何かなのかな？

「目の前のソイツよ」

目の前の？ てことは……

「わ、私？」

反応ってなに？

「……貴女、発明を持つてるね？」

発明？ それってまさか、

「コレのこと？」

鞆からある物を取り出す。確かにコレは『発明の種』というものから作られたから、発明と呼んでもいいかもしれないけど…

「こんなの、みんな持つてるでしょ？ 『発明の種』ってすごい売れたって聞くし」

「……そう、だから私はそれを回収してる」

か、回収？

「そんなの、無謀な数だよ？ それこそここに居る人全員が持つてるかもしれないんだから」

「……それはない」

「そうね、今のところ反応はアンタからだけよ」

「だからって、なんで発明を集めてるの？ コレは水野葉さんには必要ないものだよ？」

私が望んだものだから、水野葉さんが持ったところで役に立たない。

「……分かってる。でも、私はただ発明を集めるだけ。だから、それを渡して」

「……」

本気みたい、そこまでしてコレが欲しいんだ。水野葉さんには絶対いらないと思うのに…

「…分かったよ水野葉さん。コレあげる」

私は発明を差し出した。

「……ありがとう」

水野葉さんが手に持った瞬間、

「メリークリスマス、水野葉さん」

「え……？」

驚く顔を少しだけ見て、私は背を向けて駆け出した。

「…メリークリスマス…か…」

まさか今年も誰かに、同年代に言えるとは思わなかったな……
…さてと、これからどうしようかな。

「…ん？」

等と考えていると、携帯が鳴った。

開いて見ると、電話みたいだ。

発信者は…

「…もしもし？」

『あ、もしもし？ 今なにしてる？』

「別になにも、ただ街をふらふらとしてた」

『そっかー、もし良かったらさ…』

「…うん…うん…分かった。すぐ行くね」

「…メリークリスマス…」

「そう言えば今日、クリスマスだったわね、なんか時間の感覚が無
かったから忘れてたわ」

「…」

「どうしたのよエリ？ さっきの知り合いだったんでしょ？ どう
して断わったのよ？」

「…」

「そりゃアタシ達は休みも無く動いてるけどさ、こんな日ぐらい休
んでも良かったんじゃないの？」

「…そうはいかないよビーケ、クリスマスだからと言って皆が誰
かと過ごしてる訳じゃないんだから」

「まあ、そうだけど」

「…だから」

「だから？」

「…ここだけ少し。メリークリスマス、ビーケ」

「ええ、メリークリスマス、エリ」

(後書き)

恵理とビーケには、盆もクリスマスも無いんですね。

皆さんはどうでしょう？

共に過ごす方がいるのは、嬉しい限りですね

しかし、こんな可能性を持つ人も、一人はいるんですよ。
それでは、

何か一言でもよろしいので、お待ちしています。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7120p/>

オモイノタネ 8

2010年12月30日22時06分発行